



装備製作系

チートで



異世界を自由に

生きていきます

4

Author: tera

Illustration: 三登いつき



ジュノー

ダンジョンコア。
パンケーキが大好き。
かなりの天然系。

コレクト

コレクションピーク。
トウジのサモンモンスター。
優れたサポート能力を持つ。

ドレイク

エルカリノ大海賊団、
第七師団船長。
類い稀な戦闘力を持つ。

マイヤーアルバート

アルバート商会の令嬢。20歳。
損得勘定で動く生粋の商売人。
世話焼きな一面もある。

ポチ

コボルト。
トウジのサモンモンスター。
毛並みが良くコボルト界では
イケメン。

トウジ(秋野冬至)

本編の主人公。29歳。
元フリーターで異世界召喚に
巻き込まれる。
ネーミングセンスが適當。

登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

第一章 群島型ダンジョン【極彩諸島】

——極彩諸島。トガル首都より南西の海域に存在する島々のことだ。

島ごとに別々の四季や特殊な気候が存在し、独立した生態系を持つ迷宮。

数ある迷宮の中でも、そこは大迷宮という名前で呼ばれており、規模は超大そのもの。

巨大ではなく超大。この意味は、群島全域が丸ごとダンジョン、ということだそう。

さて、俺——秋野冬至がギリス行きの貨物船に同乗するまで、五日ほどの間がある。

この時間を使い、依頼を受けて極彩諸島を巡ろうではないか。

最初の島は割と近い場所にあり、行く手を阻む危険な魔物はありません。

四季折々の島々と、それに合わせた生態系があるおかげで、トガルでは季節関係なしにほぼ全種

類の魚が水揚げされるんだとか。

もちろん島には貴重な薬草類もあるのだけど、ぜひとも魚の魔物のドロップアイテムや、サモンカードを大量に獲得しておきたいところである。

「おらー、そろそろ最初の島に着くぞー！」

船頭の声が響く。ふはは、実はもう極彩諸島行きの船に乗り込んでるんだな、これが。ダンジョンへ向かう冒険者達は、ギルドと国が取り仕切る船でまとめて輸送される。

サルトのゴーレム通りみたく、魔物産業のような形になっているそうだ。

おかげで、わざわざ船をチャーターしたりする手間が省け、実に助かる。

「そういや、最初の島付近で極彩蝶を見たって話があるぜ？」

「それ本当か？ あれ、結構奥深くに行かないといけないんじゃないかなかった？」

一緒に船に乗っていたとある冒険者パーティーから、興味深い会話が聞こえてきた。

極彩蝶。その名の通り、虹色に輝く蝶々のことである。

きらびやかな羽は美しく、コレクターの間では高値で取引されるらしい。

「時期ごとに色んな島を巡ってるらしくって、今はちょうどこの島っぽいんだよ」

「マジかよ、運が良いな……できれば生きたまま捕まえたところだぜ」

特殊な加工を施した極彩蝶の羽は、アクセサリーとして女性に人気だとか。

ゲットしたら、サルトで別れたイグニールやトガル首都にいるマイヤーあたりに、装備を作って

プレゼントしよう。

「よっしゃ、なら今日は予定を変えて極彩蝶狙いでやってみるか」

「だけど、少し気がかりな話もあるんだわ」

まだ話しているようなので、船を降りるまで聞いておくか。

「ん？ なんだよ、もったいぶつてないで早く聞かせろよ」

「聞いた話なんだが、その極彩蝶を目当てに寄ってくんだよ……とんでもない魔物が」

「とんでもない魔物？」

「ロック鳥だよ」

「ロック鳥……マジかよ」

その言葉を聞いて、ゾツとした表情をする聞き手の男。

「とんでもねえ魔物じゃねえか……危険地域だろ、もはや」

「まあ、あくまで聞いた話っただけで、本当なのは知らねえけどよ。ハハッ」

「……おい、ビビらせんなよ！ まあさすがにロック鳥なんてヤベエの出るわけねえか！」

「そうだぜ、いたら即効討伐隊が組まれてるだろうよ！」

ほうほう、ロック鳥が出るって噂があるのか。良いことを聞いたぞ。

これはロック鳥のサモンカード狙いで、極彩蝶を狩りに行かねばなるまいて。

「ほら、さっさと降りろー」

船頭の急かすような声が響く。

乗っていた冒険者達は、世間話もそこに列をなして船から降りだした。

「あー、ようやく着いたぜ！ にしても意外と早かったな！」

「まだここは極彩諸島の初めの方だぜ？」

「そうだよ、奥に行くにはまた船さ。発展してんのは最初の島だけで、先に進めば船着場どころか、ただの海岸か岸壁しかなくなつて、自分達で全部用意しなきゃダメなんだぜ」

「意外と大変なんだな……」

「国の兵士さん達も観測で各地に駐在してつけど、ここはダンジョンだからな」

俺はそんな与太話に耳を傾けつつ、乗客の流れに合わせながら船を降りる。

ついに極彩諸島へと上陸。時間も限られているのだし、早く行動しようか。

「寄つてらっしゃい見てらっしゃい、極彩諸島名物の極彩クッキーさ！」

最初の島の港町を歩くと、わいわいガヤガヤとした声が聞こえてくる。

「なんのなんの、こっちは七色アクセサリーさ！ お土産にどうだい！」

「さあ、今日は良い魚が入ったからね！ みんなうちの食堂おいで！」

「素泊まり1万ケテルから、飯付きで1万2千ケテル、安いよー！」

……うーむ、ここは本当にダンジョンなのだろうか？

疑つてしまふほどに、活気に溢れた光景が目の前に広がっている。

トガル首都の自由市場となんら変わらん雰囲気なのだけど、国民性みたいなものか。

「おらおら！ ちんけな商売してんじゃねえ！ こちとら七色パンケーキだー！」

「パンケーキ!?」

パンケーキというワードを耳にして、フードの中で寝ていた、ダンジョンコアのジュノーが飛び

起きた。

「特殊な調味料で色鮮やか！ さらに味も七変化する七色の極彩パンケーキ！」

「トウジ、トウジッ！ 七色パンケーキ！ パンケーキー……キー！」

俺の目の前をハエのように飛び回り、七色パンケーキを指差して必死に訴えかけてくる。

目は血走つていて、鼻息も荒く、大丈夫かと思うほどだ。

「鬱陶しいな、もう……っ！ 七色って大丈夫かよ……」

なんだかすぐく体に悪そうな気がするんだが、俺だけか？

カラフルなものって、駄菓子くらいで良いよねって常々思うわけである。

「おじさん、味も七変化だつて言ってるし！ これは食べなきゃ損だし！」

「でもさ、ざっと見た感じ、ここにあるもの全部割高っぽいぞ」

観光名所にありがちな値段設定だ。

「味の七変化なんだから、他の物より七倍お得だし！ だったら全然安いし！」

「とんでも理論だな、おい」

「お願いお願いお願い！ 食べたい食べたい！ 一生のお願いなんだしっ！」

「わかったから目の前を飛び回るなって……はあ、ポチも大丈夫か？」

「アオン」

尋ねると、別に構わないよと頷くコボルトのポチ。

「仕方ないなあ」

呑^{のん}気に観光している時間はないのだが、旅^{たび}の醍醐^{だいご}味だし食べに行ってみるか。
しかし、ポチの特製スペシャルパンケーキの方が絶対美味^{おい}しいだろうに。



「はー、お腹いっぱい！ 満足！」

怒涛^{どたう}の勢いで七色パンケーキを食べ終わったジュノーが、満足した顔で横になる。

「おい、テーブルの上で寝っ転がるな、行儀悪いぞ」

「アオン……」

その様子を見ながら、俺の膝にちょこんと座るポチとともにため息をついていた。

実食した七色パンケーキは、七段重ねの普通のパンケーキに、七種類のジャムが塗りたくられたもの。味の違うパンケーキが七段重ねになっているものを、俺は想像していたんだけど……。

「これ……七色パンケーキって言う必要あるのか……？」

そう、疑問に思うほどのレベルだった。

ジュノーはペロリと食べきったが、俺とポチは七枚も食べきれない。一枚で良い。

「トウジ、食べないし？」

「え？」

お腹いっぱいだと満足げな表情をしていたくせに、俺のパンケーキをジッと睨^{にら}むジュノー。

「お、俺はもういらなから……食べる？」

「食べる！ 残すのはもったいないから、あたしが責任持って食べるし！」

「あっはい、どうぞどうぞ」

ほんと仕方ない奴だな、こいつ。

やつぱり、俺は焼きたてにハチミツバターを載せたパンケーキが一番だ。

色んな味を試しても、結局はオーソドックスなものに回帰してくるよね。

「そうだ、ジュノー」

「もぐもぐもぐもぐ……なんだし？ 今忙しいから待って」

パンケーキ分けてやったと言うのに、煙たがるような反応を見せるジュノー。

「こいつ……まあ良い。この島からトガル首都の部屋にドアは繋げられるの？」

「うん、できるよ！ あたしをあんまり舐めるなし！」

「ほーん、なるほどね」

ってことは、いちいち船を使わなくとも極彩諸島と首都を行ったり来たりできるわけだ。

「さすが、ジュノーえもん」

「じゅのえもんってなんだし？ 甘い奴？」

「食べ物じゃねーよ」

いや、確かにいつでも素敵な道具で助けてくれる、ある意味甘い奴ではあるが……。

「とにかく、この島までドアが繋がるなら今後の旅も楽になるな」

「えへへ、あたし役に立ってる？ えへ、褒めて褒めて」

「うん、偉い偉い」

パンケーキを口いっぱい頬張るジュノーの小さな頭を、人差し指でちょんちょんしながら褒めてあげると、彼女はニコニコとくすぐったそうにしていた。



「よし、行くか」

パンケーキの店を出てから、少しだけ波止場街を見て回った。

それからゴレオとコレクトを召喚し、街を抜け山へ入って行く。いよいよ冒険の始まりだ。

出てくる魔物は、木の上から付け狙う大きな蛇だったり、大量にまとまった羽虫の軍勢だったり。蛇は飛びかかる前にポチの嗅覚に引っかかって、あっさりクロスボウで撃ち落とされた。

羽虫の方は、ゴレオが波止場街の売店で購入した巨大な虫網を振り回して、捕まえたところを踏み潰して一網打尽だ。

「うむ、相変わらず戦闘で俺の出る幕は一切ないな」

悠々自適の散歩道である。

蛇の魔物も羽虫の魔物も、クソみたいなドロップアイテムしか残さなかった。

ただ羽虫に関しては、ドロップケテルはしつかり数の分だけ落としてくれた。

ポチの特殊効果によって、ドロップケテルの収入は50%アップ。さらに金運の秘薬を用いて20%アップブーストがかかっているの、かなり美味しい。

羽虫め……意外と侮れない。一応サモンカードもドロップする。

しかし、羽虫の塊単位でドロップするならまだしも、一匹単位で特殊能力も何もない故に、インベントリの肥やしにしかならなかった。

一匹単位だと、使い所としては鬱陶しい嫌がらせ程度しかないのである。

「コレクト、頼むぞー」

「クエーッ！」

それから、ポチの鼻を索敵に、コレクトの感覚はお宝発見に注力させた。

放ったらかしにしても、なんか金目の物を拾ってくるコレクションピークのお宝発見能力には、確かな信頼と実績がある。

「クエッ、クエクエーッ！」

「さっそく騒がしくなりましたが、何か見つけたのか？」

「んー、極彩蝶を見つけたって言ってるし！」

コレクトの言葉を、ジュノーがちやちやっと通訳してくれた。

こういうフィールドワークでは、基本的に意思疎通のやりとりはジュノーの仕事である。

「マジか……もう見つけたのか……」

山に入ってももの数時間で俺の求めていた魔物を発見するとは、さすがコレクト。

本来、島に存在するタイドグラスという薬草採取と、シママネキと呼ばれる繁殖力はんしよくりよくの高いカニの魔物の討伐が俺の受けた依頼内容であって、極彩蝶は依頼には含まれていないのだが、噂話を聞く限りだとかなり旨味うまみのある魔物なので見ておきたかった。

「とりあえず行ってみるか、案内頼むぞ」

「クエー！」

コレクトに案内されてたどり着いた場所は、色とりどりの綺麗な花がたくさん咲いており、極彩色の羽を持ったきらびやかな蝶々が舞う、まさに花園。

「わあー！」

「……！」

その花園に、ジュノーとゴレオがテンションを上げて飛び込んで行く。

「おゝ、すげえな……宝の山みたいだ」

当然、俺も目を奪われていた。

「ちょっと！ 幻想的な光景に水を差すようなこと、言わないでもらえるし！」

「いや、そういう意味じゃないんだけど……」

確かに大量の極彩蝶と薬草類は、俺からすれば金になる宝の山だが、きらびやかな光景を宝石箱に例えただけなのである。

「ねえトウジ、捕まえて、この間作った浄水の池の周りに放してみるのはどうだし？」

「うーむ、確かに綺麗だけど魔物だからなあ……」

ダンジョンで魔物を繁殖させて、それを倒し続ける無限経験値牧場。

一応、案として考えてはいたのだけど、近場に魔物がいるって状況は少し勘弁願いたく思っ、却下になったアイデアだった。

「でもでも、綺麗だし！ 小さいから大丈夫だし！」

「確かに見た目は綺麗だけど……」

何かの拍子に強い特殊個体が生まれたら、安心して眠れなくなってしまう。

「ほわわわっ!? ちょ、ちょっとこっちに寄ってこないで！」

「そうなるよなあ……」

花園に飛び込んだジュノーが、さっそく極彩蝶たかに集られて大変なことになっていた。敵だと認識されたのだろう。

一匹くらいだったら問題ないかもしれないが、繁殖力の強い虫系の魔物は、こうして数の暴力と

なつて襲いかかってくるのだ。

「むうわー！ あたしのダンジョン内だったらコテンパンにしてやるんだし！」

ゴレオに追い払ってもらい、なんとか俺の元に戻って来たジュノーはそう吠えた。負け犬の遠吠えみたいだ。

「はいはい、ダンジョンじゃないんだから大人しくしてろよ」

「むーっ！ あの蝶の鱗粉、結構鬱陶しいし！ もう嫌い！」

ジュノーの言葉から、極彩蝶の攻撃方法は鱗粉だって判明した。

「一応聞いておくけど、大丈夫か？」

「一応ってなんだし!？」

俺の言い方にそんなツツコミを入れながら、ジュノーは言葉が続けた。

「まあ、あたしの本体はダンジョンにあるから平気だけど、トウジ達は大量に集られたら喉とか鼻とかをやられちゃうかもだし」

どうやら、吸い込ませて肺にダメージを与えつつ、混乱の異常状態を与えるらしい。

綺麗な姿に似合わず、意外とえげつない攻撃方法をお持ちの蝶だった。

「なるほど、それはちょっと危険だな」

ステータスは強化した装備で底上げしてあるのだが、念のため布で口と鼻を覆っておく。

「ま、こういう時のゴレオだよ」

「……？」

俺の言葉に首を傾げるゴレオ。

「なんでだし？ 少しでも縄張りに入ると危ないって、あたし言ってるし！」

「いや、大丈夫だよ」

だって、ゴレオには鼻も口も呼吸器官もついてないからな、鱗粉攻撃は効かない。さらに巨体を活かした豪腕の一振りですべてできるのだ。

「虫タイプに岩タイプを当てるってのは、どの世界でも効果抜群なんだぜ」

「よくわかんないけど、ゴレオは平気なんだし？」

「そう。ってことで、よろしく頼むぞ、ゴレオ」

「……………」

行つてこいと命令すると、どことなく倒したくなさそうなゴレオだった。

そうだな、可愛いものとか綺麗なものの好きだからな、乙女ゴーレムめ。

「あの綺麗な羽でアクセサリ装備作ってやるけど？」

「……………」

物で釣るのはあまりよろしくないとは思うのだが、その言葉を聞いたゴレオは意気揚々と虫取り網を持って駆け出して行った。

「現金なやつだなあ、まったく」

「アオン……」

お前に言われたくねーよ、と言わんばかりの顔でため息を吐くポチ。そっちこそ、珍しい食材には目がない料理狂のコボルトじゃないか。

さて、そんな感じのことを話しつつ、極彩蝶との追いかけつこに興じるゴレオを微笑ましく見ていると、唐突にあたりが暗くなった。

「クエックエックエツ！」

「なんだ？ どうしたコレクト？」

コレクトが急に騒がしくなり始めたので、首を傾げつつ空を見上げると……。

——バッサバッサ！

とんでもない大きさの鳥が、翼をはためかせながら俺達の目の前に降り立った。

「ゴ、ゴレオ——ひえっ!？」

そのままゴレオを押し潰すように着地する鳥の大きさに、思わず固まってしまう。

体の大きさを目算すると、ゴレオよりふた回り以上も大きかった。

「ギュアアアアアアアア！ ギュアッギュアッ！」

強烈な鳴き声とともに、翼を大きく広げて威嚇する。

その行動で、強烈な風が巻き起こった。

「うおおおおおお!!」

吹き飛ばされた際、樹木に後頭部を激しく打ち付けて、頭がクラクラする。

ジュノーとポチは、俺よりも体が軽いせいか、遠くへ吹き飛ばされていた。

「クエックエーッ！」

上空へと避難して、なんとか突風から逃れたコレクトが、いつも以上に鳴きわめく。

焦ったような調子で、巨大な鳥に何かを伝えようとしているみたいだった。

「ジュノー！ 通訳してくれ！」

「ちよっと待つし！」

ポチと一緒に戻って来たジュノーが、コレクトの言葉を伝えてくれる。

「あれはヤバイから、早くキングさんにスライドしろって言ってるし！ あと、餌場を荒らしたのは悪かったから、お願い見逃してって懇願もしてくれてるし！」

見逃してって……襲ってきた魔物に何を言ってるんだ、コレクト。

でも、俺も野盗に取り入ろうとした経験があるから、その気持ちはわかります。

「つか、あれってまさかロック鳥か？」

「うん！ あれでもまだ幼い部類だし！」

「嘘だろ……」

翼を広げたら二十メートル近い大きさになるぞ。

それでもまだ幼い部類とか、完全にロック鳥を舐めてました。

「つてゴレオ、大丈夫か！」

ロック鳥にビビってる場合じゃない、下敷きになったゴレオが心配だ。

「……！」

俺の声に反応するように、ロック鳥の下から腕を出してサムズアップするゴレオ。

「ギュアッ！」

しかしあまりの巨体故に、ゴレオの力をもつてしても起き上がれないでいた。

これだとゴレオのHPが削られてしまうだけなので、キングさんと交代させる。

「ゴレオ交代、キングさん！」

「ブルアッ！」

「クエツ！ クエツクエエエエエエエ！」

「うわっ!？」

せつかくキングさんが来てくれたというのに、コレクトが激しく騒ぎ立てる。

俺の頭頂部でバサバサと、いったいなんだってんだ。

「なんで交代するのが自分じゃなくてゴレオだって言ってるし」

「ええ……いや、あのままだとゴレオ動けないじゃん」

「クエツクエツ！」

「スライドは自分の役目でしょ、早くゴレオ出して交代させろ、だつてさ」

「この鳥……」

マイヤーのペット、ストロング南蛮なんばんの爪あかの垢せを煎せんじて飲ませてやりたいくらいだった。

まあ、ろくな装備をつけさせていないから、ビじる気持ちもわからんでもない。

こういうピンチで交代するのは、いつもコレクトの役目だったからな。

「言っとくけど、交代は絶対にしないぞ？」

「クエツ!？」

ロック鳥のサモンカードはぜひとも欲しいのだ。

「つてことで、コレクト続投で」

「クエーッ!？」

バツサバツサバツサバツサ！

ああもう、煩うるさいなあ……今はそれどころじゃないつてのに……。

「ブルア！」

往生際の悪いコレクトに呆あきれていると、キングさんが水弾で文字を一筆啓上。

鳥よ、たまには戦え。

「クエツ!? クエエ……」

キングさんに凄まれたコレクトは、観念したように王冠の上に止まった。観念した先が、恐れ多くもキングさんの王冠の上って、マジかこいつ。

「プルー」

再び水弾がバシユンと飛んで、キングさんがもう一筆したためる。

主よ、我に良い作戦がある。

「ほうほう、作戦とは？」

「プルー」

どうやら、俺がサモンカードを手に入れたいってことは図鑑の中からお見通しだったようで、絶対に獲物を逃さない作戦を思いついたとのこと。

その作戦とは、俺の手持ちにある巨人の秘薬を二つ、コレクトに使って作戦だ。

「わかったけど、キングさんは良いんですか？」

「プルー」

大きさ的にはキングさんが巨大化した方が一瞬なんじゃないかと思うのだが、キングさん的には、巨人の秘薬に頼るのは本当にヤバい時だけらしい。

「了解です、キングさん」

言われた通りに、コレクトに巨人の秘薬を二つ使用してみた。

「クエエエエエエエエ！」

「うおおおおお！ でけえ！」

秘薬を二つ飲んだコレクトはみるみるうちにとんでもない大きさへと変貌を遂げる。

コレクションピークの大きさは、だいたい三十センチくらい。

それが、巨人の秘薬二つで合計二十五倍くらいになるから、約七・五メートルくらいだった。

「クエツクエツ！」

ロック鳥よりも大きくなったコレクトは、これならいけるんじゃないかと胸を張る。

まったく、気のいいやつだな……。

「ギユ、ギユア……!!」

いきなり巨大化したコレクトを見たロック鳥は、血相を変えて空へと飛び立つ。

「あ、逃げた！ 追え、コレクト！」

「プルー！」

「クエーッ！」

キングさんを背中に乗せたコレクトは、すぐさま空へと飛び立ちロック鳥に絡んだ。

「ギユ、ギユアアアアア！」

「クエー……クエー……ッ！」

上空で巨大な鳥同士が激しく揉み合い、大立ち回り。

巨大化できる時間には限りがあるので、すぐさまキングさんがコレクトの背中からジャンプして、上から下にロック鳥を殴りつけた。

「プルアアッ！」

「ギューピィッ!？」

水流ビームを上空に噴射して、それを推進力とした高エネルギーキングパンチ。

コレクトとの揉み合いの中、横つ面を殴りつけられたロック鳥は、とんでもない勢いで地面に叩きつけられ、ドロップアイテムを撒き散らした。

「相変わらず圧倒的だな、キングさんは……」

「なんか、ちよつとロック鳥、可哀想に思えてきたし」

俺もだ、ジュノー。

いつだかのアンデッドドラゴン戦から着想を得た作戦だろうな、これ。

空中にいる敵には、こつちも空へ飛んで殴りかかった方が早いってことである。

「プルア」

どしんと着地したキングさんは「仕事はしたから戻せ」と言わんばかりの顔だったので、素直に凶鑑に戻し、交代でゴレオを召喚する。

さて、キングさんの着地の衝撃に巻き込まれた極彩蝶のドロップアイテムも大量に落ちているので、みんなでさっさと回収しようか。

「それにしても……」

回収に向かう最中、少しだけ思ったことがある。

ゲーム内では、同じ秘薬を二つも同時に使うことはできなかった。

故に、コレクトが二つ使用してしつかり二つ分巨大化したことに驚きを隠せない。

「つまり、同じ種類でも制限なしに好きなだけ使えるってこと？」

……だったらヤバイぞ。

金運の秘薬とか、幸運の秘薬とか、経験値アップの秘薬とか、飲めば飲むほどに効果が上乗せされ、とんでもないことになってしまう。

ラッキーな情報を得てしまった、そう思った時だった。

「コ、コレクト!? な、なんでそんな姿になっちゃってるし!？」

ジュノーの驚いた声が響く。

「ク、クエエ……」

目を向けると、空から戻って来たコレクトの大きさが、ひよこサイズになっていた。だいたい六センチくらいのも、手乗りコレクトである。

「ええ……何がどうしてこうなったんだ……?」

「クエックエーツ！」

「秘薬の効果が切れた瞬間、なんだか前よりも縮んじやったって言ってるし」

「嘘だろ……マジかよ……」

同じ秘薬を二つ使用した結果が、この有様だと言うのだろうか。

まさか副作用があるとは思わなかった。

世の中、そう上手くは行かないもんで、同じ種類の複数使用はやめておくことにする。

二段階巨大化した結果、小さくなってしまうという副作用。

幸運の秘薬に当てはめて考えると、不幸になるってことかもしれないからね……。

「わあっ、コレクト、小ちゃくて可愛い！抱っこさせて！」

「クエエ……」

いつもはジュノーを背負うコレクトだが、今回ばかりは立場が逆転し、産毛っぽい毛並みをもふもふと抱きかかえられ、辟易^{へきえき}としていた。

「とりあえず様子見だな、しばらくは」

能力的に戦わなくても十分なので、このままコレクトは続投で行く。

【サモンカード…ロック鳥】

等級…ユニーク

特殊能力…同行するグループメンバーの落下ダメージ50%カット

ロック鳥のドロップアイテムを確認していると、サモンカードを発見した。

さっそく名前をつけて、能力を確認すると、完全に空を移動する用の特殊能力である。

せっかくユニーク等級のサモンカードなのだから、ボスダメージを増加する系とか、いわゆる当たり能力を引きつけたのだけど、これはこれで有りだな。

今後は空の移動手段として、このロック鳥は大事にしていこうと思う。

「よし、サモンカードの登録もこれでオッケーっ」と

ロック鳥の名前は厳正なくじ引きの結果、俺の案であるワシタカが採用となった。

うん、鷲^{わし}っぽくもあるし、なんだか鷹^{たか}っぽくもあるから、ぴったりの名前である。

実は鷲とか鷹って、種類によって呼び方が固定されてるわけじゃないらしいぜ？

「むー！あたしのデカレクトの方がカッコいいのに！」

「アオン！」

「……！」

「クエツ！」

ワシタカという名前が不満なのか、みんなが頬を膨らまして抗議の視線を送ってくる。

「くじ引きなんだから、フェアだろうに……」

つーかデカレクトって、まんまデカいコレクトをもじっただけで、なんの捻りもない。まともに考える気があるのだろうか、こいつ。ちなみに、あがっていたネームアイデアはこんな感じ。

- ・グレフ
- ・キャシー
- ・舎弟1号
- ・デカレクト
- ・ワシタカ

俺の案がワシタカだとして、消去法で選んでいけば、だいたい誰の案かわかるな？ カッコいいのがポチで、女の子みたいなのがゴレオ。

倒したのが誇らしいのか、調子に乗った名前がコレクトで、意味不がジュノーだ。相変わらず個性豊かだな、うちのメンツって。

「じゃ、シママネキの討伐とタイドグラスの採取に行くか」

極彩蝶の素材とロック鳥のサモンカードはすでに得たので、あとは依頼をこなすだけ。お目当の素材を手に入れてしまえば、残りの期間はのんびりダンジョン散策と行こう。



それから、山の中でタイドグラスを採取しつつ、シママネキのいる沿岸へと向かった。海に近づくにつれて、山の中にも少し漂っていた磯の香りが強くなる、と思いきや……。

——ギチギチギチギチ。

「す、すごいな……」

「カニさん、めっちゃいるし」

目の前にいる大量の大きなカニを前にして、俺達は呆れていた。

もうめちゃくちゃだよ、ひしめき合い過ぎていて磯どころかカニの匂いしか感じない。シママネキの体高は大人の腰程度、爪を振り上げて威嚇のポーズを取ると背丈ほどに。つまりデカい。

「ポチ、クロスボウって貫通する？」

「オン」

バシュッ。

「ギッ!？」

甲殻の厚みもかなりのものになって、倒すのがやや面倒かと思ったが、俺の予想に反して、ポチ

の放ったクロスボウの矢はあっさりと固そうな甲殻を貫通した。

「ギチギチ、ギギギ……ブクブク……」

ぶくぶくと泡を吹いてしぶとく生きていたようだが、しばらく時間を置いたのちに、シママネキは時間が止まったようにドロップアイテムを落として動かなくなる。

ポチに渡してある武器の攻撃力が相当高いから、相手の防御とか関係なしっぽい。

「普通に倒せるっぽいな。よし狩っていいこうか」

いつも通り、ポチは遠距離からの狙撃^{ぞげき}で、俺とゴレオは近接戦闘。

コレクトとジュノーは応援である。

「よっ、ほっ！」

最近魔物との戦いはポチ達に任せつきりになっていたが、さすがに百を超える大軍を前にしては、サボるわけにもいかない。

カニのハサミ攻撃を盾で防ぎながら、とにかく剣でカニの飛び出した目の部分を叩く。

弱点かどうかは知らないけど、大抵の動物なら弱点だろうってことで、そこを狙うのだ。目を狙う、これぞ知恵に秀でた人類の特権だな！

そう意気込んで剣を振るうのだが、俺の剣は狙いを外れてカニの頭中央に命中した。

「あっ、やば」

「ギッ!？」

しかし、頭を叩いただけでカニはぶくぶくと泡を吹いてあっさりと死んでしまった。

「あれ、一撃？」

特にすっぱり斬り裂くことも、甲羅にめり込むこともなかったのに、一撃だった。

なるほどそうか、特殊強化の攻撃力ブーストによって、俺の武器攻撃力は店で売られている通常の武器の約八倍くらいに上昇しているから、即死したのだろう。

八人から寄ってたかって攻撃を受けているようなもんだから、さもありなん。

「ギチッ！」

「ひよばわあっ!？」

呑気に剣を見ながらそんな考察をしていると、足元に寄って来ていた別のカニのハサミが俺の股間にクリーンヒットしていた。

挟まれちゃう、と思った時にはすでに挟まれていて、なんだか鈍い感触が股間に走る。

そこは男の弱点。弱点を狙う知恵こそ人類の特権とか調子こいたバチが当たったのだ。

息子、終わった……と、一瞬頭が真っ白になったのだが。

「……あれ、痛くないぞ？」

なんと俺の装備の防御力(VIT)を、カニは超えることができなかったらしい。

よかった……と、心の底からホッとした瞬間だった。

やっぱり基本は防御からだろうってことで、装備の強化も潜在能力も全てVITを優先して整え